Ⅳ まとめ

1　古墳の性格（fig.10）

発掘調査により時期不明の３基の古墳を検出した。いずれも削平されて埋葬施設は明らかでないし、建物基礎により寸断され方墳か円墳かも確かめられない。それでも遺存状況から見ると、SX5985と5990は方墳に、SX5995は円墳に復元するのが妥当であろうか。また周溝からの出土遺物は、わずかに土師器細片と埴輪片１点に過ぎず、年代を特定することができない。これら単独では評価は難しいが、参考となる成果が周辺の調査で得られている。まず、今回の調査地から西へ400ｍほどの地点で、奈良市教育委員会が1992年に行なった第243次調査で方墳１基が見つかっている[(1)]。古墳の周溝から陶邑編年のＴＫ23型式並行に比定できる須恵器９点が出土している。また、同じ奈良女子大学附属中・高構内で、本調査区から南へわずか50ｍほどの地点の立会調査により、1985年に土坑内から一括埋納された土師器・須恵器が出土している[(2)]。遺構の性格は不明ながら、遺構図を見ると、この土坑が埋葬施設の墓壙であり棺外に副葬された土器群になることも考えられなくもない。出土した須恵器は、奈良市調査のものと同じく、陶邑ＴＫ23型式に当てている。

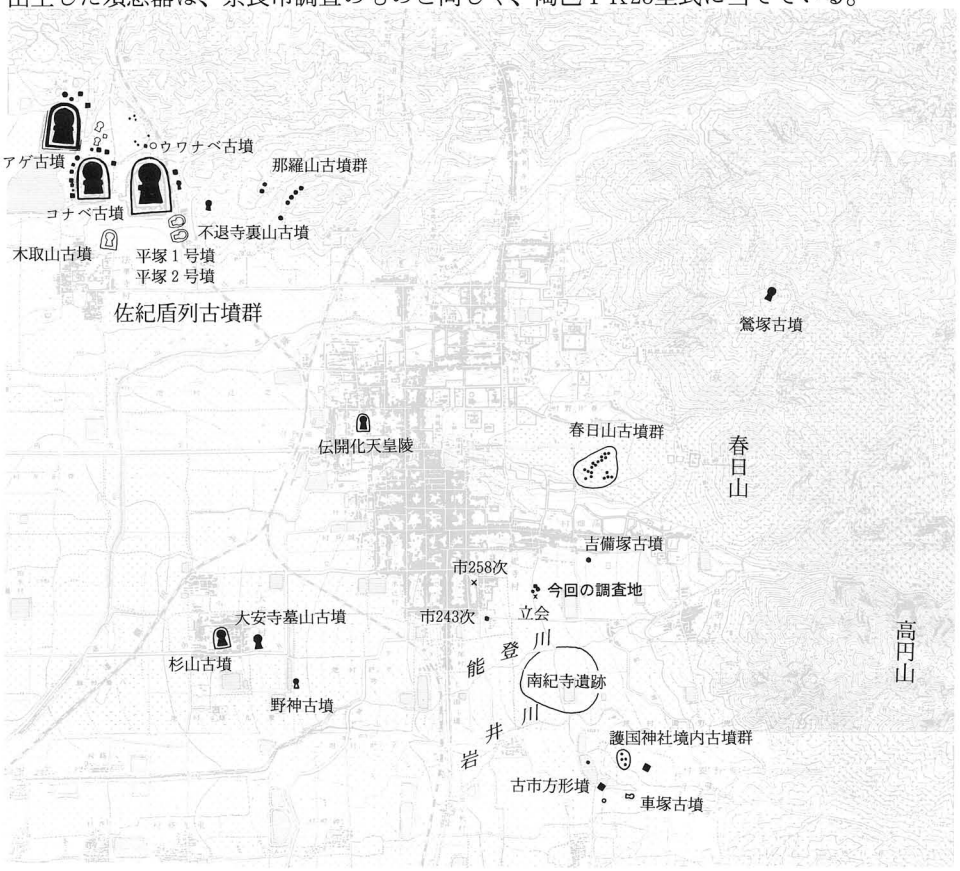

fig.10　古墳時代の奈良盆地東北部（１：50000　明治31年発行の仮製２万分の１地形図に加筆）

このように、発見された古墳はまだまだ数少ないとはいえ、面的にある程度広がることが予想できる。いずれも一辺ないし径10m前後の小規模な古墳である。今回発見された3基の古墳についても、積極的根拠は乏しいながら、どちらかというと方墳を基調とすること、また埋葬施設は削平されているとはいえ横穴式石室を想定しがたいことから、奈良市調査の方墳と同じような築造時期を考えたい。これらは横穴式石室を採用した円墳主体の群集墳ではなく、その前段階に位置付けられる木棺を直葬するなどした方墳主体の古墳群であろう。5世紀後葉から6世紀前葉にかけての築造時期が考えられる。この古墳群は、春日山と高円山を分かつ谷が盆地に出たところで形成した扇状地に立地する。明治31年(1898)発行の仮製2万分の1の地形図を見ると、旧奈良市街のはずれで市街化しておらず、水田が広がっている。近世の絵図などを検索する余裕はなく確かめていないが、おそらく耕地化にともない早くに埋没していたのではないか。ただ、今回の調査区からさらに東側の、奈良教育大学構内には吉備塚と呼ばれる古墳があり、このあたりでは墳丘を残す唯一のものである。現状では径17mほどの円墳状の墳丘である。ここからは最近になり画文帯環状乳神獣鏡の破片が採取されている[3]。熊本県江田船山古墳出土鏡ほか9面の同型鏡が知られるものである[4]。

ここで注目できるのが古墳群の南にある南紀寺遺跡である。1990〜91・93年の調査で、石積みによる護岸施設をともなう濠が検出され、まだ全容不明ながら、豪族居館跡ではないかと推定されている[5]。濠は5世紀中頃以前に掘られ6世紀前半には廃絶したと考えられている。また、この地点から南へ250mの地点では、5世紀後半から6世紀前半にかけての竪穴住居数棟からなる集落跡が見つかっている[6]。初期須恵器の出土も注目できよう。以上のように、南紀寺遺跡を生活拠点とし、その北側縁辺に墳墓地をもつ、ひとつの地域勢力が存在したことがうかがえる。この地域勢力の首長が、杉山古墳（墳丘長約145m）および大安寺墓山古墳（墳丘長約80m）の被葬者と考えたい。この2基の前方後円墳は、先の古墳群からは距離的にはやや離れるとはいえ、扇状地から続く同じ台地の先端に位置する。杉山古墳は、奈良市教育委員会が調査を継続しており、出土した埴輪などから5世紀後半の年代が考えられる[7]（fig.11)。墓山古墳は年代を考える資料に乏しく位置付けが困難だが、人物埴輪の出土から杉山古墳に前後する時期を考えておけばよいだろう[8]。また、野神古墳は竪穴式石槨に古式の刳抜式家形石棺をおさめた古墳としてよく知られている[9]（fig.12)。墳丘は開墾によって著しく損なわれているが、前方後円墳に復元することも可能である。その場合は、50m前後の規模になろうか。棺内には鏡2面・直刀3口・玉類若干が副葬されていたらしい。また、大正末年から昭和初年には石室が調査され、剣菱形杏葉を含む馬具類が出土したという。この石棺の石材は二上山のピンク石で、奈良盆地東辺に分布のまとまる「三輪型」とされ、5世紀後半の年代が与えられている[10]。また、五島美術館には「大安寺村古墳出土」として銅槃作細線式獣帯鏡が所蔵されている[11]。この鏡は5世紀後半以降頻出する、多くの同型鏡が存在する一群の鏡のひとつであり[12]、杉山古墳や墓

山古墳あるいは野神古墳から出土した蓋然性が高い。野神古墳の石棺内の鏡は径1尺と記録されており、この2面についても画文帯同向式神獣鏡などの同型鏡の多い一連の鏡であろうか。先の吉備塚古墳の画文帯環状乳神獣鏡もその1種である。

以上のように、5世紀後半頃を中心として100mを前後する前方後円墳を首長墳として築き、南紀寺遺跡に居館をもうけた勢力があったことが確かめられる。今回の調査で検出された小規模墳は、この地域勢力を構成した有力家長層の墳墓と位置付けられよう[13]。この地域勢力が、古墳時代中期前半以前にどこまで遡るのかは明らかでない。古市方形墳や北方の鶯塚古墳と系譜的につながるのかどうか、なお検討を要するが否定的に思われる。ただ、奈良市教育委員会が1992年に行なった第258次調査において、鎌倉時代の井戸から出土した石製合子が注目できる[14]。単独であれば付近の古墳から出土したものとは必ずしも言い難いが、円筒埴輪片をともなうことから、古墳そのものは全く不明ながら、近くに前期末の古墳を考えることが適当かもしれない。これが妥当であれば、先の方墳ともほど近いことから、前期末ないし中期初頭に系譜が遡ることも考えなければならない。その場合、杉山古墳などとの年代的な開きがいくぶんあるため、今は消失した未知の中期前半期の古墳を想定することになる。しかし今のところ、その可能性を残しながらも、この地域勢力の盛期はやはり5世紀後半以降であったとするほかない。しかし、この隆盛も古墳時代後期に入って衰退する。豪族居館とされる濠は6世紀前半には埋るとのことであり、また100mを前後するような首長墳も5世紀末以後は続かないようである。5世紀末から6世紀前半という時期は、近畿およびその周辺では、多くの地域において大型前方後円墳の築造が中断することが指摘されており[15]、こうした動向はこの地域においも当てはまるのである。6世紀前半以降、首長墓と目される中・大型古墳は今のところ見出しがたく、6世紀中頃以降、横穴式石室を埋葬施設とする、いわゆる群集墳が2群認められる程度である〔春日山古墳群・護国（高円）神社境内古墳群〕。

fig. 11　杉山古墳測量図（1：2500）

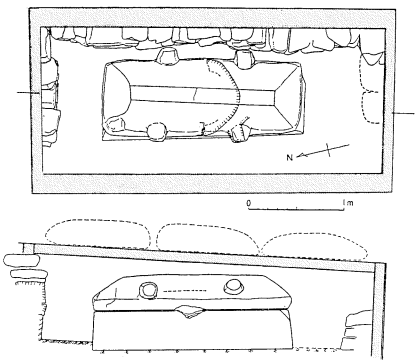

fig. 12　野神古墳石槨実測図（1：80）

2 結　語

今回の調査地は、平城京外京の東方外にあり、京東条里四条一里に相当すると考えられている。奈良市街地東南部の住宅密集地にあたり、あまり調査の進んでいる地域とは言い難い。今回の調査面積は1500㎡に及ぶものであり、周辺においてこれまで実施された調査のなかでは、かなりまとまった広さをもつといえる。調査面積の広さから、条里遺構の検出が期待され、また、調査地南ほど近くでは古墳時代の遺構・遺物などが出土していることから、古墳時代の遺跡の発見も予想された。

調査の結果、予想以上に近代～現代の攪乱が著しく、旧講堂造成時の削平が地下深くにまで及び、ほとんどの遺構は既に失われていることが明らかとなった。しかし、残存状態は良くないながら古墳時代中期の方墳ないし円墳や、奈良時代～平安時代の井戸・土坑などを検出し、それらの遺構からは少量ではあるが、土器、土製品、瓦などが出土した。

3基の古墳は、破壊が著しく、墳丘規模や埋葬主体部などの詳細は不明である。また、出土した土師器・埴輪などはいずれも小片であり、時期の比定は困難である。しかし、残存する周溝から見て方墳を基調とすること、横穴式石室を埋葬施設としたことは考え難いこと、西方の紀寺町で本古墳と同じ扇状地上に立地する、5世紀後葉の須恵器を伴う方墳が見つかっていることなどから、本古墳も5世紀後葉から6世紀前葉頃に築造されたものと考えたい。これらの古墳が一体となり、古墳群を形成していたと考えられる。

古墳群の南に位置する南紀寺遺跡では、5世紀中頃以前から6世紀前半頃の石積み護岸施設をもつ濠跡や、5世紀後半から6世紀前半にかけての、竪穴住居数棟からなる集落跡が発見されている。おそらく、この古墳群を形成した地域勢力は、南紀寺遺跡を生活拠点としていたのであろう。そして、この地域勢力の首長が、杉山古墳、大安寺墓山古墳の被葬者と考えられた。両古墳とも、本古墳群の立地する扇状地の西端に位置しており、出土した埴輪から、5世紀後半頃の年代が考えられている。南紀寺遺跡に生活基盤をおき、その北方の東西に長く延びる扇状地上に墳墓を営み、杉山古墳や墓山古墳の被葬者を首長としていただく、地域勢力の存在がうかがえるのである。なお、古墳群そのものの内容や地域勢力の具体的様相・系譜などについて、多くの解明すべき問題もまた、残されている。今後の周辺地域における調査の進展が期待される。

土坑は、出土土器から奈良時代後半～末頃の年代が考えられる。土馬と墨書人面用土器の出土が注目できるが、出土状況からは祭祀遺構とは考えにくい。井戸は、出土土器から見て、9世紀の前半～中頃に廃棄され、埋没したものと考えられる。9世紀前半頃に使用されていたのであろう。後世の削平が著しいため、今回の調査では、これらの遺構に伴う掘立柱建物などは検出できなかった。従って、奈良時代から平安時代にかけての、本遺跡の具体的な様相を明らかにするには至っていない。出土瓦からは、本遺跡と新薬師寺との関連も考えられるが、周辺の調査の進展をまって改めて検討すべきであろう。

註

（1）三好美穂・武田和哉「平城京左京五条七坊十三坪の調査　第243次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、1992年。

（2）坪之内徹「東紀寺遺跡出土土師器焼成の（須恵器）高坏」『韓式系土器研究』Ⅳ、1993年。

（3）粉川昭平・清水康二「吉備塚古墳表採の銅鏡について」『青陵』第77号、1991年。

（4）川西宏幸「同型鏡の諸問題－画像鏡・細線獣帯鏡－」『古文化談叢』27、1992年。

（5）関野豊「南紀寺遺跡の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成2年度、1991年。森下浩行・武田和哉「南紀寺遺跡の調査　第2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、1992年。奈良市教育委員会『南紀寺遺跡第4次発掘調査成果概要』1994年。

（6）森下浩行「南紀寺遺跡の調査　第3次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。

（7）末永雅雄「大安寺杉山古墳」『日本考古学年報』7、1958年。鐘方正樹・久保邦江「史跡大安寺旧境内の調査　第54・55次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。

（8）小島俊次「大安寺地区」『奈良市史』考古編、1968年。

（9）小泉顕夫「大安寺字野神古墳発掘検分書」『大和文化研究』第2巻第4号、1954年。小島俊次「京終地区」『奈良市史』考古編、1968年。

(10) 和田晴吾「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号、1976年。

(11) 小島俊次「京終地区」『奈良市史』考古編、1968年。

(12) 川西宏幸「同型鏡の諸問題－画像鏡・細線獣帯鏡－」『古文化談叢』27、1992年。

(13) 和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版　古代の日本』第5巻〈近畿Ⅰ〉、角川書店、1992年。

(14) 久保邦江「平城京左京五条七坊六坪の調査　第258次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成4年度、1993年。

(15) 白石太一郎「日本古墳文化論」『講座 日本歴史』1〈原始・古代1〉、東京大学出版会、1984年。